

グローバル世界の市民性教育としての世界史

専攻：教育内容・方法開発専攻

コース：認識形成系教育コース

学籍番号：M11143H

氏名：古塚 明日人

I. 研究の目的

近年、若者の内向き志向や海外経験の少なさを指摘し、グローバル化への対応の遅れが指摘されることが多い。政府もその対応を検討するに至った。こうした現状や自分自身の経験をもとに、より多くの若者にグローバル化した世界で活躍してもらう方法とはどのようなものなのかという疑問が浮かんだ。本研究は、世界史の教え方、学び方が変わり、日本の若者がグローバル人材に近づく一助となることを目指す。

II. 研究の概要

第1章では、まず「グローバル化」という現象そのものへの理解を深める。社会学者らの研究をもとにし、現代という時代の姿、グローバル化という現象が生み出した新たなリスクの姿を浮き彫りにし、次にモデルとして、ブレア政権時代のイギリスの政策を検証する。そこで明らかになる個人の資質の必要性から市民教育の形を明らかにする。

続く第2章では、日本の課題を、「グローバル人材育成戦略」を見ながら、ヨーロッパのグローバル化への対応との比較を行い、現在の日本に求められているシティズンシップ教育がいかなるものかを探る。次にグローバル人材に必要な資質を整理し、グローバル化し、あらゆる領域が絡みあう状況に向きあうために必要な、文化への理解の重要性を明らかにする。また、ここでは知識のあり方にも触れておく。現代に必要な知識のあり方である。

第3章では、シティズンシップ教育と学習指導要領の教科・科目の「目標」を照らし合わせることからはじめ、次にそれを担うべき存在としての社会科教育の意義を、誕生の歴史から読み取る。そこで明らかになるのが、世界史誕生の背景には、そのときの世界の情勢を知るといった目的が

あったという点だ。そこから世界史という科目についての検証をはじめ、現行の世界史の問題点を探る。

現代に相応しい世界史のあり方を検証するのが第4章である。まずは「新しい世界史」を提唱した羽田正の取り組みを検証し、問題点を明確化する。さらに、学習指導要領やシティズンシップ教育と合わせて検証することで、羽田に欠けていた、世界史の目的を探る。その後、目的を市民性教育に明確化した、新しい「世界史」を提案する。

新しい「世界史」の中から、第5章では3つの単元をモデルとして紹介する。世界のことを理解するためには、情報は多いよりはあった方がいい。よって、旧来の系統主義的授業を否定しない。問題は、その情報を扱うことのための資質を身に付けていないことである。ここで取り上げる3つの単元は、グローバル化や異文化を理解し、他者と協同して生きるという、この時代に必要な市民性の資質を身につけるためのものである。ただし、本研究は学習・教授法についての研究ではないし、「価値注入型」の授業であるなどの批判もあるだろう。しかし本研究はそのことを問題視しておらず、子どもたちに自発的に考えさせ、気づかせるための学習・教授法などは別の議論とする。

III. 研究の成果と今後の課題

本研究は、新しい「世界史」の目指すべき方向を明らかにしたのみである。教科教育の研究においては、様々な学習・教授法が提案されている。これらの授業法との融合なども可能であろう。

また、本研究のような「世界史」は、「価値注入型」であり、好ましくないという批判もあろう。しかし子どもたちが自発的に解釈し、考えることができるようになるためには、手本を示すことが必要だ。そのために価値の注入を

行う。一般化した認識はどこかで身につけなければならない。それが新しい「世界史」という場なのである。そのうえで、学習・教授法についての研究を反映させ、子どもたちが身につけた一般化した認識を駆使し、特殊の例を自発的に解釈し、議論し、考えてくれることを期待したい。

また、本研究では触れられなかった点がある。本論文中でも幾度となく言及した、英語の価値についてである。世界に数限りない言語がありながら、それらに触れずに英語のみにしか教育上触れないというのは、異文化尊重の精神とはかけ離れている。そうした理解をするにも、世界史は有効なはずなのだ。これほど多彩な言語に触れられる科目は他にはない。グローバル化の中で異文化・異言語への理解を進めるための取り組みも新しい「世界史」には取り入れてゆくことを考えなければならない。

本研究は、現在のところ、実践も、検証もしていない。研究が次の段階へ進むには、研究の成果を学校現場で実践し、それを検証することが必要である。その上で問題点をあぶり出し、そこを修正してゆかねばならない。その際には言語体験としての世界史、教科教育研究において先に実践されている学習・教授法の導入を図ってゆきたい。

IV. 論文の構成

序章

研究に際して

研究の課題および論文の構成

第1章 現代はどのような時代で、どのような人材が求められているのか

第1節 現代とはどのような時代か

第2節 グローバル化が生むリスク

第3節 リク対応には個人の資質が必要となる

第4節 求められる「グローバル人材」(イギリスの事例をもとに)

第2章 グローバル化に対するにあたって、日本が抱える課題

第1節 日本はどういった課題を抱えているのか

第2節 グローバル人材に本当に必要な資質とは何か

第3節 「ローカライズ能力」—資質1—

第4節 なぜ文化を知ることが必要なのか

第5節 一般化した知識としての文化理解—資質2—

第3章 世界史は、その時代を理解するために生まれたものである

第1節 社会系教育には何ができるのか

第2節 社会科の誕生と歴史教育の目的

第3節 世界史はなぜ必要か

第4節 歴史的思考力とは何か

第5節 世界史に特有の目標とは何か

第6節 世界史の問題点

第4章 新しい「世界史」

第1節 羽田の「新しい世界史」

第2節 羽田の「新しい世界史」の問題点

第3節 世界史の「目標」の意味

第4節 「世界史」の目標を「市民性の教育」に

第5節 学習指導要領上の世界史の「内容」

第6節 新しい「世界史」としての「内容」の検証

第5章 新しい「世界史」の授業モデル

第1節 『ギリシア人』はいかにして誕生したか—自己アイデンティティの形成— ((2) 諸地域世界の形成—ア)

第2節 「世界の一体化がもたらす『グローバル』の誕生と『自己』の変化」 ((4) 諸地域世界の結合と変容—イ)

第3節 「大量生産・大量消費の誕生と拡大—グローバル化の中のローカライズ—」 ((5) 地球世界の到来—エ)

終章 グローバル世界の市民性教育としての世界史

第1節 新しい「世界史」のかたち

第2節 今後の課題

主任指導教員 森 秀樹

指導教員 森 秀樹